

第1章 研究の目的と方法

数年前のリゾート開発ブームは、余暇時間の増大への対応、地域開発への期待などを背景として、大いに盛り上がりを見せた。しかし、その一方で、環境問題や、開発手法など様々な問題が表面化し、その勢いに反比例し、リゾートブームも終息に向かった。

その中で、リゾートの問題点の一つとして挙げられたものに、多くのリゾートが欧米の先進事例の模倣で、かつ”金太郎飴”とも呼ばれるような画一的な開発であることが指摘されている。確かに気候風土、国民性が違うわが国では、異なったリゾートの計画思想を描くことも必要であろう。また、リゾートの多様化が求められている昨今、金太郎飴をいつまでも許す訳にはいかない。

そのためには、今一度、西洋のリゾート思想が導入された明治期のわが国のリゾート開発の原点に立ち返ってみるべきである。こうした傾向は文明開化を急いだこの黎明期にもみられたはずである。ただし、やがて、近代日本的な特徴を持つ形に変わっていったのではないだろうか。

したがって、これらを研究の対象とし、その開発にみられる計画思想を明らかにしていくことは、今後のリゾート開発への示唆を与えるものと考えられる。

戦前のリゾートに関する研究としては、湘南、軽井沢といったある一つの別荘地に着目してその成立と展開の過程を論じた筆者らのグループによる一連の研究がある。しかし、これらは自然発生的な別荘地を主にその研究対象としており、プランナーによって意図されたリゾート開発計画に関して検討を行った研究はいまだない。

そこで、本研究では、わが国の計画的な海浜リゾート開発の草分け的存在である神奈川県・大磯の「禰龍館」、鎌倉の「海濱院」、千葉県・稲毛の「海氣館」を取り上げ、そこにみられるリゾート計画思想を、対比的な考察を混えて、明らかにし、近代におけるわが国のリゾート計画思想の原型の一つを見いだすことを目的とする。

研究の方法としては、まず、湘南、房総地域に関する地方史・地誌などの新旧の文献を収集・分析することにより、明治期から戦前までの両地域におけるリゾートの発展過程の概略史を明らかにする。

次に、それらの発展を促す背景となったリゾート思想を、当時の世相を記した新聞記事、風俗・医学関連の新旧の文献を収集し・分析することにより、考察する。

それらを踏まえて、大磯の「禱龍館」、鎌倉の「海濱院」、稲毛の「海氣館」の3つの事例を、代表的リゾート開発計画として取り上げ、史誌、伝記などの文献、当時の写真、絵図、地図、及び現地調査、関係者へのヒアリングにより、設立当時の地域の状態、開発計画、その後の発展過程などを考察する。

最後に、これらを、いくつかの視点から対比的に眺め、それぞれの開発計画の類似点、相違点をまとめ上げることによって、明治期のリゾート計画思想の特徴を浮き彫りにする。